

バルト論文『神の義』1916年再考

浜辺 達男

キーワード：第一次大戦 良心 バベルの塔 神の義 生ける神

World War I Conscience the Tower of Babel the Justice of God

The Living God

Der erste Weltkrieg Gewissen der Turm zu Babel die Gerechtigkeit Gottes
der Lebendige Gott

概要

第一次世界大戦が始まった1914年8月末、カール・バルトはマールブルク大学の教授マルティン・ラーデに宛てて彼の戦争賛成の姿勢について抗議文を送っていた（“Karl Barth Martin Rade Ein Briefwechsel” 1981 S.95-98 Karl Barth: “Offene Briefe 1909-1935” 2001 S.25-31）。ドイツ皇帝を中心にしたドイツ帝国の覇権主義は、中立国ベルギーをドイツ軍が侵犯しても、反対者はキリスト者の中にも見付けられなかった。雑誌『キリスト教世界』編集者でもあったマルティン・ラーデも他のドイツ人と同様であった。中立国スイスで生きるバルトは、そのような思想と行動を黙認するわけにはいかなかった。この抗議文によって起こったさまざまな出来事は、バルトにとって大きな波紋を投げかけることとなった。先に刊行した拙著『バルト神学の出発』（2001年4月刊）は、これらの経過を論究したものである。

何故カール・バルトの神学が、現在も問題になるのかについて取り上げる。バルトは新しい時代に合致する神学を恣意的に創意工夫して考案したわけではない。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて教育を受けた者のひとりとして、バルトも時代の子であった。十九世紀に謳歌された自由主義、近代主義の中にあるキリスト教神学もまた、自由主義神学、近代主義神学と称賛されていた時代に、その中心的存在であったマールブルク大学で、牧師となる直前の教育を受けた後、故郷スイスにおける牧師に就任した。百パーセント・マールブルク人と自他ともに認める自由主義神学者のひとりであり、1911年以降アールガウ州のザーヘンヴィル村の牧師として、説教と宗教教育に取り組んでいる最中、第一次の戦争が始まった。

「この日（1914年8月31日）、バルトは自分ではまったく気付かずに無心のうちに行動しながらも、19世紀の自由主義神学に対して宣戦を布告する破目になったのである」と大島末男がその著『カール・バルト』（清水書院、36頁）で述べるように、自由主義、近代主義からの脱出の第一歩が踏みだされたのである。

第二次世界大戦時中のヒトラーによる「ユダヤ人大量殺戮」という20世紀の大試練に、いずれの神学、哲学も無力を露呈する中で、バルト神学だけはこの大きな課題を前にしても崩れることがなかったことを、テオドール・W・アドルノは『啓蒙の弁証法』で以下のように述べている。「キリスト教会は、カトリックのように善行を積むことであれ、プロテスタントのように内的信仰を求めるのであれ、とにかく教会の定めた教えに従えば人々は救済への道を見出すだろうということを基にして成り立っているはずなのに、じつはこの目標となる救いそのものには保証がないからである／以上のことに対する予感、当初からキリスト教にまつわっていたのだが、それを神学の要に据えたのは、ただパスカルからレッシング、キルケゴールを経てバルトに至る逆説的な意味でのクリスチャン、公認のキリスト教には反対の立場をとるクリスチャンだけだった」(徳永恂訳280頁)。なおこの問題は最近の研究、Eberhard Busch: “Unter dem Bogen des einen Bundes Karl Barth und die Juden 1933-1945” に詳しく取り上げられ、邦訳『カール・バルトと反ナチ闘争』がすでに出来ている。

今ここで取り上げる講演「神の義」は、講演がなされた直後、雑誌『新しい道』4月号に掲載されている。この雑誌はスイス宗教社会主義運動の機関誌のような役割を果たしていたが、実際はこの運動の一方のリーダー、レオンハルト・ラガーツの編集によるものであり、ラガーツの私的判断に基づく偏向があったことは確かである。当初はバルトは好意を持って迎えられ、バルトのラーデ宛の抗議文とその返事が往復書簡の形で掲載されたのも、この雑誌であった。1916年の前半この講演をすぐに掲載しているが、同年後半はクリストフ・ブルームハルトに関するバルトの書評「神の国を待つ」は編集者ラガーツに拒否されている。このように当時の新聞・雑誌にどのような形で取り扱われているかは、講演・論文等の本来の意図が何であったかを知るためには、とても重要であることは、他の学問領域でも論じられている。H. F. エランベルジェ「歴史家の仕事」には力動精神医学の歴史家は三つの課題を前にすると述べ、次のような方法を提案している。(著作集2 中井久夫訳219頁)

「① まず事実を確定することです。

② 次に思想体系を明らかにすることです。

③ 三番目は出典を明らかにし、このいろいろな体系による影響を追跡することです。」

いま取り上げている講演が論文として公にされたのは、8年後の1924年に刊行された“Das Wort Gottes und die Theologie”『神の言と神学』というバルトの第一の神学論文集の第一論文として掲載されてからである。本書の翻訳は1941年になって実現している。1941年といえば、当時の日本は太平洋戦争開戦直前の異常な緊張の中にあつたことが充分に考えられる。そのような中で、数名の教授・牧師たちの手によって翻訳されている。特にこの論文は、当初の翻訳者蘆田慶治が約三分の二ほどの処で逝去され、それを補充して、土居真俊が担当して完

成している。蘆田慶治は同書翻訳の中心的人物であったことが、「はしがき」により判明する。この際その冒頭の部分だけを引用・紹介しておきたい。

「一昨年の初夏に、久しく休止状態にあった此の講演集の翻訳を再会の議が起こるや、出来上った暁には在天の二人のお方、即ち、蘆田慶治先生及び松尾相兄に献げることが申し合はされた。満二年の曲折を経て今やうやく上梓の日を迎へるを許されるに当り、先ず謹んで此の翻訳集をお二人にお献げする。(以下省略) 昭和十六年六月八日 橋本 鑑」

このような事情下、本論文が元は1916年1月アーラウ市教会における講演であったことは周知のことだとしても、スイス・アールガウ州の州都アーラウにあって、どのような時代的背景をもったものであるのかなどということは、紹介者も読者も殆ど念頭になかったことは確かで、日本にバルト神学を紹介しなければならないという熱情だけがあったのだと思う。それ故、ここでの紹介・翻訳が雑誌『新しい道』からのテキストを基にする姿勢は、字句の校正の問題としてではなく、その時代背景を知ることがその解説に是非必要であることを、主張しようとする点にある。現に1941年の翻訳には原文にして十二行が全く注記もなく割愛されていることを発見した。当時の日本の政治情勢を考えるならば、この部分のために発禁の処置がとられる恐れのあることは、誰もが予感したに違いなかった、と推測できる。

「何故ならそれぞれの国の形態の中で、国家の義も、また世界意志の内面の性質には、手を触れないからです。確かに、国家の義は世界意志によって支配されています。今の戦争はここでの、そのことの強い説得力をもつ実例です。国家が野性の獣からひとりの人間を作り出そうと試みることから離れてしまい、逆に、国家は無数の企みによって人間たちを野獣になるように強制しなければならない。悪魔は、このバベルの塔をも嘲笑うことが出来ます。」

このように、「国家」によって人間が「非人間化」される危険を警告する、との内容から考えるならば、当時の軍事体制の中で、この部分を意図的に割愛したのではないかと思われる。

この論文の基となった講演を担当するようになる、当時の三ヶ月間のバルトの身辺を、トゥルナイゼン宛の手紙によって検証できる範囲でさぐってみるならば、以下ようになる。

- 9月22日付 三週間の宗教教育授業から、休暇により、解放される
- 10月 5日付 アールガウ州教会総会の議長に次の提案を提出した
 「(アールガウ州) 教会総会は決議する
 通常守られる総会礼拝は、単に国家の教会管理当局としての総会精神によるもので、内容としてはキリスト教的な宣教とは到底言いがたいものである。今後この総会礼拝は廃止されるであろう」
- 10月 6日 長男 マルクース誕生
- 10月 8日 1才半の長女フランチスカを伴って、ベルンへの休暇旅行に出掛ける

- 10月15日付（ベルンから） 10日ミュンスター教会でシェデリンの説教を聴く
11日シェデリンと散歩 17日の同教会での礼拝説教を依頼される
- 10月17日 9月26日ザーヘンヴィルで語った説教を再度ミュンスター教会で語る
同教会で多くの名士、旧友に出会う
- 10月21日 ザーヘンヴィルに帰る
- 10月22日付 ザーヘンヴィル教会で連続講演会を企画 トゥルナイゼンに一回依頼
- 10月30日付 繊維工場の婦人たちの待遇悪化
- 11月 4日付 妻の厳しい説教批判 議長ミウリイがバルトの提案を採択
- 11月12日付 11日の総会での議決 賛成（今年）51票 反対（来年）68票
- 11月15日 バーゼルでヴェルンレ教授を前にしての講演「戦争時と神の国」担当
- 11月21日付 バーゼル講演についての自己批判
- 11月23日付 妻との口論 救世軍の友人の講演の良い印象 エプレヒト講演には「数年間の私自身の思考方法を、強く私に思い起こさせた」とある
今晚 シルトは何を話すのか？ 明晩 トゥルナイゼンが担当
- 12月 3日付 トゥルナイゼンの婚約者同伴と、講演に感謝
「聖者ヘラー」に総会以来の誤解の解消のために出掛ける
- 12月 8日付 教育委員会企画の講演「宗教と社会主義とは一致し得るか」を7日に担当させられる 今朝プライスヴェルクの宗教教育授業を見学
来年から100フラン給料があがる
- 12月13日付 ラガーツから『新しい道』掲載のための、説教を送るように要請される
ザーヘンヴィル教会役員会で、バーゼル講演を四時間かけ発表
同教会で講演会を開催するよう役員会から要請を受ける
- 12月20日付 何と、アーラウ市教会の役員会が 1月16日の講演を私に依頼してきました。
今、燃えている石炭を頭の上に乗せるか、「良き事柄の勝利」なのか、それとも両方なのでしょうか？ 勿論私は承諾しました。
そして、「神の義」について語ることにしましょう。

以上の往復書簡に見られるバルト身辺の様子を概観するならば、今迄親友トゥルナイゼンとの限定した交友関係であったのが、9月第3日曜日のスイス祈祷日以後は積極的に周辺に、友情の輪を広げる傾向にあったことがわかる。その中には、州の教会総会で「開会礼拝廃止」の狼煙を上げたり、苦手としていたバーゼル大学教授のヴェルンレとも討論をする姿勢を見せていた。このような積極的な発言の中にいるバルトに対して、州都アーラウ市の市教会から、ここで取り上げる講演の依頼があったことがわかるのである。

翻 訳

講演『神の義』 1916年1月16日 於スイス アールガウ州都 アーラウ市教会
Karl Barth: "Die Gerechtigkeit Gottes" Ein Vortrag, gehalten am 16. Januar 1916

I

「主のために荒野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ！ 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れる！」（イザヤ書四〇章三節一五節）と、荒野で叫ぶ説教者の声があります。

— この声は私たちの良心の声です。この声は「神は義である」と私たちに告げます。神の義は問い掛けでも、謎でも、問題でもありません。神の義は事実（Tatsache）です。最も深い、最も内的な、最も確実な事実（Tatsache）です。良心が私たちに知るようにする最も確実なものの以外の何ものでもありません。どのようにして私たちがこの事実（Tatsache）を定着させるかが、ここでの神の義の問い掛けなのです。

君は計算する理性（die rechnende Vernunft）をもってこの事実（Tatsache）に取り組んではなりません。理性は小さいとか大きいとかを見ますが、偉大なもの（das Große）を見ません。理性は過ぎ行くものを見ますが、最終の有効なもの（das Endgiltige）を見ません。補うものを見ますが、根源的なもの（das Ursprüngliche）を見ません。複雑なものを見ますが、単純なもの（das Einfache）を見ません。人間的に存在するものを見ますが、神的に（göttlich）存在するものを見ません。

君はこの事実（Tatsache）について、人々によって教えられようと願ってはなりません。神の義について一人の人が他の人に言うことは出来ます。一人の人が他の人に恐らく、この言葉について深く考えるように仕向けることは出来ます。しかし誰も他の人に言葉の背後に潜むものを、固有な、直接的な、決定的な確実性をもって伝えることは出来ません。私たち人間は（神の）委任によってお互い語るようにして、今後もう一度学ばなければなりません。律法学者のようであっては絶対になりません。私たち全員が、お互い助け合うようになるのには、余りにも技巧的で素直でなく、経過的なのです。

君は良心（das Gewissen）を語らせなければなりません。良心は君に既に神の義について語ります。その結果、神の義は君にとって確信になります。良心は殆ど音を出さないように宥められ、大地に踏み付けられ、愚かなことや犯罪にまで誤って導かれることがあっても、良心はいつも天と地の間の唯一の場所、その場所に神の義が私たちに啓示される、その場所に留まっています。君自身についての考慮、君の家庭、職場や国家における義務の履行、さらに宗教的考えや感情の君の義務、即ち生活についての考慮を、あたかも別の世界からのラッパの轟きのように、良心は遮断します。時には良心は、君に対するひどい脅迫的な非難攻撃として、その

宣告をもって現われます。時には安らかな堅固な主張として、時には君の意志に向かったの命令的な課題として、時には君に対する仮借のない拒絶として持ち出した妨害として、時には君を大地に踏み付ける呪いと劫罰として、時には君自身とそこにある全てのものを越えて、立ち上がる祝福に満ちた喜びとして、良心は現われます。— しかし良心は最も深い基礎では常に同じ意味で君を目覚めさせ、君を不安に醒まさせる同じ方向に君に道を指し示しつつ良心はやって来ます。君の諸経験の全ての交替と変化にあって、君の生活と経験全てが一つの目的をもっていることを、良心は君に証言しています。行ったり来たり、喜んだり悲しんだりする全ての感情にあって、君の現存在の意味を良心は君に語っています。その意味は喜びよりも高く、苦痛よりも深いのです。私たちの意志の現実味とか、強度とか、清浄とかにあって、上とか下とかの全てにあってさえ、それ自身に誠実であろうとする意志にあって、良心は私たちに語っています。そしてこの良心が神の義なのです。

それ自身で明らかであり、独立しており、恣意と移り気からは切り離されている、一つの意志を知覚する、と思うところで、私たちは義を喜ぶのです。有効であり、曲げられない一つの秩序を、それ自身でもつ一つの意志を知覚すると思うところで、私たちは義を喜ぶのです。そして今、良心は全てのうちの最後のもの、最深のものが、このような意志であり、神が義である、と私たちに語っています。私たちがそのことを知るにより、私たちは生きています。確かにしばしば私たちはそのことを忘れ、それを乗り越えて進んだり、足で踏んだりします。もし私たちが最も深い基礎でそれを知ることがないならば、人生にあって、「神が義である！」に全然踏み止まることは出来ないでしょう。

何故なら私たちは不義の下に悩んでいるからです。不義の前に私たちは恐れています。私たちの内にある全ては不義に抗議しています。確かに私たちは義についてよりは、不義についてずっと多く知っています。人生の大小様々な遭遇にあって、私たちの自分の振る舞いや他人の振る舞いにあって、詳細に見れば見るほどますます鋭くなるような、全く違った意志を、私たちは自分たちの前に絶えず持っています。その全く違った意志は有効な変わらない秩序を全然感知しないで、むしろ恣意、気紛れ、自己追求に基付いています。そのもの自体で一体でなく、分裂していて誠実を欠いた意志で、論理と関連を欠いた意志なのです。このようなものが私たちであり、人生であり、世界なのです。計算づくの理性はこの全く違った意志を歓迎し、このようにいつもやってきたし、そのようにいつもあり続けるべきだと、実地に私たちに示のです。しかしこの不義の意志の結末をも、私たちは目撃しています。その結末とはかすかか大きくか、潜かに明らかに、いろいろな様相の中での不安、無秩序、滅亡なのです。商売上の競争の悪魔たち、民族戦争、階級闘争、全ての階層における道徳的墮落、上層における経済的暴力支配、下層における奴隷根性という苦悩と犯罪を、私たちは目の前にしています。この物事につきくどくどと説明し、最後に私たち自身と他の人々にとっても要領よく、全てがそれぞれ必

然的な理由がある、と証明することは出来るでしょう。私たちは誤って思い込むことが出来ます。そのことにより、私たちは義を内的に外れることが出来たでしょう。このことのために私たちが悩むという単純な事実について考え及ばないでいます。重い荷物のように、これら全てが私たちの上にのしかかって、私たちは耐えられないのです。その人生を有効にするのか、無効にするのか、と私たちを悪魔に仕立て上げます。私たちは陰の中で生きています。地上に充滿し支配している不義の意志により、人生は私たちにとって無意味なものになろうとしています。時には私たちはそれについて騙されてしまうかも知れません。時には私たちはそれに甘んじるかも知れません。不義の意志は、私たちにとって自然のことでも自明なことでもありません。何故なら不義な意志は生来負えるものではなく不可能なことなのですから。「もともと不義とは異なるもの (etwas Anderes) である」ということを、私たちが知っていることにより、私たちは生きています。そしてこの異なるものが最も恐ろしい、私たちを折々捉える不安です。しかしこの異なるものが最後には不義に対して決定権を持っています。この恐ろしい思想が、今私たちを駆り立て、へとへとに疲れさせる「不義の意志が人生における唯一の最も深い意志である」ことを、私たちに思いつかせます。この不可能な「あなたの不義と仲直りせよ！」との決心が開けます。「世界が地獄であり、そちらに身を向けよ！」が、あなたに生じます。まことにそう見えます。

そして今、この困窮と不安の只中にあって、バッハのフーガのテーマのように、「否、それは本当ではない！ 君や私の曲がった麻痺した意志を越え、不合理な狂気の世界意志を越えて、もしそのものが一度効果を發揮して私たちの目に映るのは全く違った結末をもたらさなければならぬ時には、率直、純粋である別のものがある」との良心の確証が、惑わされないで一貫して起こるのです。もしこの別な意志が認知されたならば、この別な意志から別の人生が成長するに違いありません。もしこの別のものが突き破って現われるならば、この別な意志から新しい世界が構築されます。この（別な）意志が働くところにこそ私たちのふるさと (unsere Heimat) があります。「私たちはそのふるさとを失ってしまった。しかしもう一度そのふるさとを発見することが出来ます」。そこには義なる神の意志があります。 — 溺れるものが藁をつかむように、生きている私たちの内部にある全てが、良心が私たちに与えるこの確証に向かって手を伸ばします。私たちは、そこであやふやに向かいあっているのではなく、確実に輝いているこの別なものに直面したいのです。私たちの内面の最も深いところから、「ああ、あなたが天を裂き、降り給え！」という、最も深い憧れが生まれてきます。これは自分と他人の不義に脅かされ抑圧され、義に向かって、神の義に向かって叫びを上げる際、これは人間各自にあって、人間における最も強烈なもの (das Gewaltigste) です。此処で神を理解する者は、神の全てを理解します。此処で神に手が届いた者は、神に役立つことが出来ます。それ故にモーセ、エレミヤ、洗礼者ヨハネは人類の記憶に忘れられない群像なのです。彼らは人間に最も深い困

窮をあらわに告げました。彼らは彼ら自身の良心を語らせ、彼らは彼ら自身の神の御前への憧れに目覚め、目覚め続けたのでした。彼らは主のための道を備えたのでした。

II

しかしここで、神の義に対する私たちの経験における顕著な転換 (Wendung) が起きます。良心のラッパが鳴り響いて、私たちは身をすくめ、聖なるものに出会ったと感じます。しかし、私たちの困窮と不安から本当に私たちを救い出そうとは直ぐには思いつきません。そうではなく、この時全然別のことが起こります。『煉瓦を作り、それをよく焼こう』と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言った。」このように私たちは自分の力で助け、バベルの塔を建てます。神の義への、私たちの内にある嵐のような神の義への願望を満たすことに、嗚呼、私たちは取り組みます。そしてこの願望を満たすというのは、こっそりと神の義を沈黙させることを意味します。あたかも私たちが、私たちの最も深い困窮から、自分たちの叫びを上げるのを長いこと耐えることが出来ないかのように (急いで)。あたかも私たちが、あまりの真実な完璧な、私たちの憧れの成就を前にして、恐れおののくかのように。「必ず起こらなければなりません！」と良心が語り、私たちが聞いています。しかし私たちは良心を最後まで語らせようとはしません。私たちは目を醒まさせられました。しかし何が本来の問題であって、何を起こさなければならないのかに気付く前に、現実起こったことにより私たちは寝呆けたまま突撃しています。ここで最も深い人類の錯覚 (Irrtum) に、本来的な悲劇的な人類の錯覚に私たちは直面しています。(a) 私たちは神の義を必要としていますが、私たちの人生、私たちの世界に神の義が入り込ませることをしないし、ずっと入り口を塞いでいるために、この領域に入り込ませることは出来ないのです。(b) 本来的に私たちに必要であるもの (das Eine Notwendige) を、永いこと片隅に押しやり、このような状況の中で、代用の薬 (Ersatzmitteln) で病み、さらに病気が進むようになる迄、ずっとあとの「よりよい時」まで延期してしまっているので、その必要であるものが私たちを助けられないのを、私たちは知っています。(c) 私たちは出掛けて行き、私たちの人間の義、人間の重要さ、人間の真面目さの情けないバベルの塔を建てます。(d) 良心の呼び声への私たちの応答は、全生活に拡大した特有の代用品 (Surrogat)、特有な巨大な「かのように！」(“Als ob”) なのです。そして「かのように」私たちが考え、語り、行動したいと願うため、そのかぎりにあって、真剣であるかのように、何かを起こすかのように、良心に対して何かを従順にしているかのように、— その故に、そのかぎり、私たちが飢え渴いて望んでいる義の真実味は、私たちからは外れて行きます。

私たちがこのようなことをするのを、高慢 (Hochmut) と呼ぶべきではありませんか？

私たちが渴望する義は神の事柄 (Sache) であり、ただ神からの働き掛けだけで私たちに出来る事が出来る事が、心の中では私たちの意に添わないのです。丁度私たちが多くの他の事柄を操作しているように、私たちは生命に賭けても、喜んでこの大きな事柄 (Sache) を手に入れ、運転を開始するでしょう。私たちがまさに義は (地上に) 存在しえないのを無視して、本来それはどんな意志であるかも考えないで、義が単純に私たちの意志によりプログラムに取り入れられるのは、私たちには、最高の願わしいことであるかのように、見えます。「私たちは何をなすべきか?」と言った騒がしい問いを、提起する権利を問題にしないで、あたかもそれが第一の最も緊急な問いであるかのように、私たちは受け入れます。あらゆる種類の改良、衛生、方策、文化運動と宗教運動に、ただ出来るだけ早く手を付けよう! 「積極的な働き」に出来るだけ早くとりかかろう! そこで良心のトランペットの一吹きが本来的に伴っていた不安を与える要素は間もなく何なくなっていくのをご覧下さい。圧倒的な世俗意志に直面して私たちが抱く不安は、私たちがふたたび反省したり、批判したり、構成したり、組織したりすることに関わって、ゆっくりと、かのノーマルな幸福な感情へと変わって行きます。新しい世界への切望は、苦しみと鋭さと内心の不安は、全てが失われ、前進の喜び (Fortschrittsfreude) になりました。

神の義自体が (die Gerechtigkeit Gottes selber) 最も確実な事実 (Tatsache) から、多種多様な高度な理想の中から、最高の理想へとゆっくりと変わってしまい、今や全ての面で、私たちの完全に全く、各自の事柄 (unsre eigene Sache) になってしまいました。私たちがこの理想を今喜びに満ちて窓にかかげたり、そして今ふたたび何か防護する旗のように、ふたたび巻くことが出来る点に、このことが示されています。「汝らはあたかも神の如くなるであろう」(創世記三章五節)。あなた方があたかも神で「あるかのように」あなた方は行動できます。あなた方は神の義を、各自が励む努力なしに、受け取ることが出来ます。このことこそ、まさにあきらかに高慢 (Hochmut) です。

しかしこのことを、同じように、良き臆病 (Verzagtheit) と呼ぶことも出来ましょう。私たちの神との関係にあって、この (高慢と臆病という) 二つの対立概念が、もともとは相互に並んでいるとは、際立ったことです。私たちはまさに基本では、私たちの人生の中に、私たちの世界の中に入り込もうとしている神の義の流れを前にして、不安を抱えています。安住している市民は結核病、ゼネラル・ストライキ、戦争と聞いて、ぞっと身震いをしますが、切迫している神から起こる人生のラディカルな方向転換を考え、さらに不義の結果、不義そのものの終わりをもたらすことが出来ると思えるのは、市民にとってはさらなる別の痛みなのです。今日はかくも進歩の馬車に乗ってあちこちに勇ましく走狗し、多様な理想の小旗を振っている上機嫌な文化人が、次のことが起こる明日には、(a) 人間は小さく不完全なこと、(b) 間もなく一度にわかったり、うすうす分かるという、人間からは多くを求めたり期待したりすることは許

されないし、「一面的」であるのも許されていないこと、(c) 神の義に対向して反省したり、改良したり、達成したりするものは何もないこと、(d) 気の利いた新聞記事すべてと勤勉に出席する議事会議などは全然重要でないこと、(e) ここで、全く新しい生活世界に対向して、一面的な肯定と否定を問題にしていること、以上のことを、不安のうちにあなたたちに思い起こさせるであろう。私たちの内には実際に別なもの、新しいものがあり、その下で始めることが出来るのに、私たちがずっと小さくずっと人間的に思っているがために、私たちは神の義の前で不安を抱いてしまうのです。このことが私たちの臆病 (Verzagtheit) なのです。

このように高慢であり、このように臆病であるので、私たちはバベルの塔を建てるのです。それ故私たちは神の義を私たちの不器用な手で様々な人間の義に変えるのです。

私たちのモラルの義、善き意志を、私は考えます。私たちが希望的に全部を或る綱領と徳目に発展させ、活動するところの善き意志を考えます。嗚呼、世界はモラルに満ちています。しかし私たちは本来何処へこのモラルで行き着いたのですか？ 私たちのモラルはいつも例外状況にあります。「私たちの意志の技巧的な脱臼であり、どこにも新しい意志などない」と、私はあやうく言うところでした。「君は君のモラルによって自分自身を止揚せよ」と、私たちはかつて、節約、家庭本位、職業精励、祖国愛を語りました。時には或いは特殊のケースで、君固有の水平面と君の人間仲間を越えて、自分自身を維持しつつ君は一般的な不義の中から自分を切り離し、君だけのために — 見かけだけ離れて — 庭付きの家に住むことが出来ます。しかしこのことによって本来、何が起るのですか？ 不正義、自己追求、勝手気負な世界意志が、これによって沈黙し、克服して、君が君のモラルによって — 見かけだけ — 少し片隅で君だけ救われるのですか？ まさに君のモラル、君の百の他の点で世界意志に堅く縛られている君のモラルが、洞察を妨げていないのではないか？ 君のモラルが、現場の現存在の深い困窮に対して盲目にし、妨害していないか？ 私が資本主義の社会秩序と戦争を思い起こす、まさに人生の最大の恐ろしいことは、大声のモラルの綱領によって正義が実行できるという顕著なことではないのだろうか？ 悪魔は、モラルさえも利用でき、私たちが塔に辿り着いたバベルの塔を、嘲笑うことが出来るのです。

(以下の 14 行は昭和 16 年刊の『神の言葉と神学』には割愛されていたことが判った)

国家と法律家の義。不思議な塔！ 私たちの不義の意志の確かな好ましくない帰結の前に、多少は私たちを守るために、最も不可欠な、必要な代用品であります。良心の安心のためにとっても望ましいものです！ しかし、本来国家は私たちに何をするのでしょうか？ 国家は人間の意志の気分と恣意と自己追求を秩序付け、組織化することが出来ます。国家はその規則と威嚇によって、人間の意志に対する確かな妨害に対向することが出来ます。国家は、国家の洗練と改良のために、確かな諸施設と諸学校その他を、設置できます。尊敬に値する仕事の巨額が全ての部分に支払われ、価値に富む生計の数百万が、国家のこの塔建設のためにだけ密かに浪費

され、犠牲にされたことがあったし、これからもあるでしょう。それは何のためでしょうか？ 何故ならそれぞれの国の形態の中で、国家の義もまた世界意志の内面の性質には手を触れないからです。確かに、国家の義は世界意志によって支配されています。今の戦争はここでの、そのことの強い説得力をもつ実例です。国家が野性の獣から、一人の人間を作り出そう、と試みることから遠く離れてしまい、逆に国家は無数の企みによって、人間たちを野獣になるように、強制しなければならないのです。悪魔は、このバベルの塔をも、嘲笑うことが出来ます。

私たち自身と人間仲間との交わりや、被造物と政治との交流の、衝突とともに、或いはそれを越え、黙想の聖別された時間を祝う可能性を、また毎日の灰色の海に浮かぶ永遠の緑の島のように、キリスト教に逃げ込ませる可能性を、宗教が私たちに与える場合には、かこわれているとか、確保されているとかの素晴らしい感情が、私たちが至る所で感じている不義の力にも拘らず、安心感情が保たれます。資本主義、娼妓制度、土地家屋の投機、飲酒横行、脱税、軍国主義の、私たちのヨーロッパにあって、宣教と道德、いわゆる「宗教的生活」がその止まることを知らない道を進むことで、自分たちを慰めることが出来ると思うなら、この考えは謎に満ちた幻想に過ぎません。私たちもまたキリスト者です！ さらに私たちの民族はキリストの民族です！ 謎に満ちた幻想、自己欺瞞の幻想！ ここで私たちは先ず第一に威厳を持たなければなりません。私たちは今までとは違って、「一体全体、私たちは何をもっているのか」と、公に問い掛けなければなりません。説教すること、洗礼を受けること、信仰告白すること、鐘を鳴らすこと、オルガンを弾くこと等を「何のために？」と、問わなければなりません。全ての宗教的な気分や教訓、「夫婦同伴者」への「道德的＝宗教的」忠告、映写機を備えた教会付属施設とか備えていないものとか、聖歌隊の活性化のための刺激とか、言うのも恥ずかしい平凡な、馬鹿げた教会月報とか、現代風な教会らしさを演出するその他のものなど、一体何のためなのでしょう？ これらのことを通して、神の義と私たちとの関係に、何か変わったことが起こるのでしょうか？ これらのことを通して何か変わることは、私たちだけが期待しているのでしょうか？ これによって何かが起こることを私たちは望んでいるのでしょうか？ それともこれによって最も洗練されたものが現われることを私たちはもう望んでいないのでしょうか？ 決定的なもの、そのことが起こらなければならないのでしょうか？ またそれは起こっていないのでしょうか？ またはそのことは多分決して起こらないのでしょうか？ 私たちは宗教的義をもってさえも、「あたかも ― のように」といった、本物が行動してはならないために、私たちは行動しないのでしょうか？ 私たちの宗教的義さえも、私たちの高慢と臆病の産物にすぎないのでしょうか？ 他のすべてのものを越えたものとして、悪魔が大声で嘲るバベルの塔に過ぎないのでしょうか？ 私たちは深く、とても深く人間の義の只中に差込まれているのです。私たちは良心の叫びで呼び起こされましたが、寝呆けた遊戯程度の、神的な義の影の像をもって行動する以上には何ももたらさなかったのです。神的な義そのものが私たち

には大きすぎ、高すぎたのでした。それ故に困窮と不安が存在しています。まだそこにある困窮と不安を私たちは不義のために悩まなければなりません。私たちの中にある良心は更に叫びます。私たちの最も深い憧れは止みません。

Ⅲ

「神は義であるかどうか」という全く意味のない問題に直面したり、神の義が私たちにとって全然辻褄の合わない方法で一つの問題となり、討論の対象になるというのが、今の精神的状況なのです。戦争を通じて、この「神は義であるかどうか」という意味のない問いが、もう一度「目下焦眉の問題」(“aktuell”) となったのです。今はこの状況の中で、大声でか静かにしてか、粗いか細やかにか、何れにしても、この問題に騒がしくしていない教会は、この辺りの地上には何処にもありません。本当を言うと、「もし神が義であるならば、今この世界で起こっている全てを、神が“許す”筈があらうか？」との問いが、私たち全員の中にごろごろと音を立てています。

これは意味のない問いでしょうか？ もしこの神が「生ける神」を意味しているのであれば、全くもって無意味です。何故なら、生ける神は私たちの良心にご自身を啓示して、一瞬も「義なる神」以外の何者でもないからです。生ける神に向かって、「貴方は義ですか？」と問うことは、無意味です。神が存在する様子を私たちが見ることが出来る場所とか、神が存在する様子を私たちが認知し、神を所有したいかどうかを、神が私たちに問う場所は、無意味です。もし私たちが、私たちの高慢と臆病の中でバベルの塔に到達し、人格的であるか非人格的であるか、私たち人間の正義、私たちのモラル、私たちの国家、私たちの文化、私たちの宗教の、神秘的、哲学的或いは初心な背景と守護神であるならば、もし私たちがこのように神に向かって発せられるのであれば、この意味深い正しい重要な問いは、とても意味深いのです。そうです、私たちがこの神を神と考えているから、「神は義であるのだろうか？」と問うことがとてもまともだと思うのです。やがて答えも与えられます。このことは私たちの悲慘であり、出口も解決もない悲慘なことです。即ち私たちは何千もの技術工夫により、私たちの映像に従って一つの神を作り上げてしまいました。慰めのない問いを提起することが出来たり、提起しなければならなくなり、その結果、慰めのない答えを与えなければならない、一つの神を持たなければならないとは、何と私たちは、出口も解決もない悲慘な状態でありましょう。「神は義であるのか？」との問いに打ち当たって、私たちのバベルの塔が崩れ落ちます。私たちに今もう一度燃え上がった、この問題にあって、神抜きで私たちがある種の義を持ちたかったことが広言されました。確かに私たちは、神抜きで神に抗して、神を持ちたかったのです — そしてこのことはうまく行かないことが宣言されました。この神は何の神でもないことが、示されました。まさにこの神が一度だって義であることなどありません。この神の信者たち、抜群のヨーロッパ的、

アメリカ的文化人たち、社会福祉人たち、進歩人たち全員が、また、実直な、勤勉な国家市民たちと敬虔なキリスト者たち全員が、炎と殺人でお互いに襲いかかって、インドとアフリカの貧しい外国人の不信の念と嘲りを受けるようになるのを、この神は一度だって妨げませんでした。この神は本当に不義の神で、一遍に根本からこの神に対する懷疑者、懷疑的な人、嘲笑う人、ついには無神論者になるという、ぎりぎりの時です。私たちがこの神のためにバベルの塔を立てた、この神は神ではない、と公に喜んで告白する、ぎりぎりの時です。この神は偶像です。この神は死にました。

生ける神、名誉を回復した神の愛こそ、神ご自身本当の神なのです。これが解決です。私たちの困窮と不安の中で、「神の義」を私たちが思い起こす時に、私たちの良心が願うところを安んじて聴くことを、私たちは全然始めなかったのです。私たちは自分たちで、何か似たようなことをしたいものと、熱望してきました。私たちはその代わりを大急ぎで、あらゆる手段で、避難小屋を作ってしまいました。私たちはふるさとを天幕に代え、物事の平常な経過をモラトリウムに代えました。私たちは、「あなたの御心がなりますように！」と祈りながら、結果的には「あなたの御心が、今はなませぬように！」を考えていました。永遠の生命を信じていながら、私たちが生きてそこで満足させる、現実的永遠は間に合わせのものでした。神を無視して、私たちが過ごしてきたのと同じものを残していました。そして（人間たちの）義が残りました。こうして神の義は、私たちの目の前から消えてしまったのです。神ご自身が、私たちには疑わしいものになってしまいました。神の場所には、私たちの思想による問題の多い作りものが、立っていたのでした。神の義との関係を築くための、根本的な別の道（einen grundsätzlich ändern Weg）があります。

語ること、反省すること、考えることを止めて、私たちが沈黙して、私たちが神の声をやっ
と聞いた後に、神の声に向かって良心が語ることにより、私たちはこの別の道に出会うのです。私たちが最後に良心に語らさせるならば、「不正義を超えた正義という何か別なものが存在するだけでなく、ずっと重大なものが存在する」と、私たちに告げるのです。私たちが恐れ、私たちがどうしても持つ必要がある、この別のものとは神の事実（Sache）なのです。神が義であって、私たちが義なのではありません！ 神の義が永遠の義なのです！ 私たちが聞き逃してしまうのは、このことなのです。私たちは疎遠になっていますが、このことを再び聞くことが必要なのです。私たちのモラル、文化、宗教によって、ゴウゴウと鳴り響く音を作り上げています。私たちが沈黙へと到達させられるならば、私たちの本当の救済が始まるようになるのです。

私たちが神そのものを再び神として認知することを、何よりも先ず取り上げることになります。要するに認知すること。しかしこの認知することは、文化的、社会的、愛国的課題全てと並んで、「倫理的＝宗教的」努力全てが子供の遊びに過ぎないほどの課題なのです。何故なら、それらは自分たちで神を超え、神の意志を超えるために、私たちが自分自身を取り上げるから

なのです。神の意志を実行することは、神により新しく始めることなのです。神の意志とは、私たちの意志のより良き、継続では断じてありません。神は、私たちの意志に対向して、完全に別なものとして立つからです。神に対抗するなら、私たちの意志にとっては、ただラディカルな刷新にすぎません。改革、新成長、新生ではありません。何故なら、私たちの良心に啓示される神の意志は、完全な神の意志として、清潔、善意、真理、交わりなのですから。これこそ、神の義なのです。この神の義に対向するのは、謙遜が第一でなければなりません。私たちはこの方向で、すでに何かを十分に果たしたのでしょうか？ 私たちはこの謙遜を何か自明の前提として行動し、この前提を越えて行って、様々な（バベルの）塔建設から脱け出すことが出来るのでしょうか？ 私たちは、この前提の創作に、すでに取り掛かっているのでしょうか？

第二に、全ての自信喪失に代わり、幼な子の喜びが登場してきます。私たちが自分で考えていた以上に、神はずっと大きいということの喜びです。私たちが自分で夢見ていた以上に、全く別の深さと意味を持つ、神の義についての喜びです。私たちが自分たちの綱領と、自分たちの理想主義と、自分たちでキリスト教について夢見ていた以上に、私たちの哀れな混乱に満ちた過重な人生のために、ずっと多く、神から期待されていたという喜びなのです。ずっと多く期待されています！ 私たちは自分たちの感情を、全ての面で撒き散らすべきではありませんでした。私たちは新しいバベルの塔を繰り返し建設することにより、混乱の中に、かくも愚かに自分たちの心を奪わせるべきではありませんでした。私たちは、自分たちと隣人たちに、自分たちの不信仰を納得させるために、私たちの信仰を消費させるべきではありませんでした。神的に考えるよりも、人間的に考えることをいづれの場面でも、より敬虔、より賢いと思っていたために、いつも繰り返し、私たちは最も実り豊かな瞬間を利用しないで、塗り潰させるべきではありませんでした。私たちは全力で、神から多く期待され、神から事実私たちを目覚めよう望まれることを成長させ、神が私たちにいつも提供しているものを、目覚めて祈りながら、神の創造に従って行くのを受け入れることに、精を出すべきでした。子供のように、偉大な神とその義について喜ぶことと、神に全てを一層信頼することに、私たちは全力をもって精を尽くすべきでした。私たちはこの方向ですでに十分に何かをしたのでしょうか？ そこで流れることが出来たほど、豊かに源泉は流れているのでしょうか？ 初めのようになお、神に向かって正しい創造的な喜びのうちに、私たちもまた立っているのでしょうか？

聖書では、この謙遜とこの喜びを、信仰と呼んでいます。私たちが信仰するならば、全ての雑音に代わって、静かになり、神が私たちに語るままにし、別な神は存在しないで、義なる神が存在することなのです。そうすれば、神は私たちに働き掛け給います。その時ラディカルな不義は克服されて、新しいことが私たちに始まり、芽を膨らませ、真実となり、信じられる所、そこが古い戦争世界、金銭世界、死の世界の只中にあったとしても、新しい霊が始まります。それこそ、神の義の世界なのです。一つの新しい世界は、新しい霊から成長するのです。私た

ちが今いる困窮と不安の世界は、この新しい始まりがある所では破壊されてしまいます。古い軀は砕かれ、偽の偶像たちは揺らぎ始めます。今、何か真なるものが起こり、この唯一の真なるものとは、「神自身が今や神の事実（Sache）をその手に受け取った」ことが起こることです。生きることは再びその意味を受け取ります。個々人の生きること、全体で生きること。神の光が暗闇に働き掛け、神の力は弱いところに働き掛けます。本当の愛、本当の真実、本当の進歩が可能となり、モラル、文化、国家、祖国、宗教と教会が今はじめて、今こそ可能となります。さらなる展望が、人生の上に将来が開け、ここ地上での世界の上に将来が開けます。この世界の中で、義なる神の意志が高く挙げられ、有効に働き、天で実現するように、実現します。かくして、遠い異質な高い、神の義は私たちのものとなり、私たちの大きな希望となるのです。

この内部の道、素直な信仰の道をイエスは歩んだのでした。ここにはモーセ以上、洗礼者ヨハネ以上のものがあります。人類はこの道の可能性を既に汲み尽くしたとは誰も言えません。私たちは多種多様にイエスから作り出しました。私たちは最も簡単なこと、「イエスは神の子であり、私たちが彼と共にその道を歩むことが許されており、この道の上で信じる以外は何もしません。父の意志に真理があり、その真理は生起しなければなりません」ということを、ほんの僅かしか捉えていません。地域の平面でのこの解決は、子供のように許されていることに、反論できます。私はそれに落ちました。この子供じみた許されている解決の中で、一つのプログラムを立ててみましょう。人間の人生は豊かに美しくするためと、反論する以上に、大きな満足となりましょう。私たちが今までずっと進めてきたバベルの塔の振動が、信仰の内部の道にはほんの僅かでも私たちを近づけるために、果たして充分強かったのかどうか、示されることでしょう。そのための機会は今こそ、ここに 있습니다。起こったことは存在できます。しかし、起こらなかったことも存在できます。早いか遅いかで、それは起こるでしょう。別の道は存在しません。

カール・バルト

分 析

本講演は三つに分けられている。順を追ってその内容を分析してみる。先ず第一の部分。ここでバルトはこの「神の義」が、何故問題となるかを上げている。

I

旧約聖書イザヤ書 40 章 3 節－5 節「主のために荒野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ！ 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れる」を引用し、「この荒野で叫ぶ説教者の声は、私たちの良心の声（die Stimme unseres Gewissens）です。この声は『神は義である』（daß Gott gerecht ist）と私たちに告げます」と述べる。

良心 (das Gewissen) は多くのそれまでの神学者たちによって取り上げられてきた、自由主義神学の重要なコンセプトでした。バルトがこの「良心」というコンセプトを用いたのは、ごく初期に限られた期間でした。バルトはこの時期、まだ自由主義神学との区別を考えていなかったことを示している。私たちがこのコンセプトに出会ったのは、1915年6月6日のザーヘンヴィルでの説教でした。その説教には「私たちの人間の世界の只中には、初心な素朴なものが存在しています。しかも、それはより確かな、天国のしるしなのです。それが良心です」と冒頭に語っている。それは当日の説教のテキストである、ローマ書2章15節「彼らの良心もこれを証しており」を根拠にしていた。バルトは本講演において、この「良心」が登場する動機を次のように述べている。

「何故なら私たちは不義の下に悩んでいるからです。不義の前に私たちは恐れています。私たちの内にある全ては不義に抗議しています。確かに私たちは義についてよりは、不義についてずっと多く知っています」。この時期はまだ第一次世界大戦が激しく闘われている。ドイツ皇帝をはじめ、ドイツの政治的責任者たちが主張していた“Not kennt kein Gebot!”「緊急時ニハ戒メハ無効！」が、戦時下のドイツにおける個々の作戦行動の弁解となって、繰り返されていた。中立国スイスで、このようなドイツ人たちの戦争狂気にショックを受けた者は、バルトだけではなかった筈で、1914年8月以来、バルトはこのテーマを抱え、悩み続けていたことを、この文章は示している。続いて「人生の大小さまざまな出会いにあって、私たちの自分の振る舞いや他人の振る舞いにあって、詳細に見れば見るほどますます鋭くなるような、(神の義とは) 全く違った意志が、(神の) 有効な変わらない秩序を全然感知しないで、むしろ恣意、気紛れ、自己追求に基付いています」と述べている。これは中立国のスイス人を含め、戦争の渦中に住むドイツ人全員の言動と行動をも暗示している。

このような言動と行動を「計算する理性」(die rechnende Vernunft) と捉え、「計算する理性はこの(神の義とは) 全く違った意志を歓迎し、このようにいつもよってきたし、そのようにいつもあり続けるべきだと、実地に私たちに示すのです」と語る場合、「戦争勝利」を叫び続ける隣国ドイツを当然前提にしている筈である。中立国スイスに比べ、大国であるドイツの戦争行動は、スイスに生きる人々にとって大きな影響を及ぼしている。「私たちは陰の中で生きています。地上に充満し支配する不義の意志により、人生は私たちにとって無意味なものになろうとしています。時には私たちはそれに甘んじるかも知れません。不義の意志は、私たちにとって自然のことであり明のことでありませぬ。何故なら不義の意志は生来負えるものではなく、不可能なこのからです。『もともと不義とは異質なものが存在している』(es gibt eigentlich etwas Anderes als Ungerechtigkeit.) ということを知っているが故に、私たちは生きています」と語るバルトは、その立場を明確に示している。

バルトの叫びは、「そして今、この困窮と不安の只中にあって、バッハのフーガのテーマのよ

うに、『否、それは本当ではない!』(nein, das ist nicht wahr!) 君や私の曲がった麻痺した意志を越え、不合理な狂気の世界意志を越えて、もしそのものが一度効果を発揮して私たちの眼に映るのは、全く違った結末をもたらさなければならない時には、率直、純粹である異質なものがあつた(es gibt einen andern, der ist gerade und lauter)」と述べるように、「異質な別なものがある!」との、良心の声なのである。さらにバルトは、「この(別な)意志が働くところにこそ、私たちのふるさとがあります」(Wo dieser Wille gibt, da ist unsere Heimat.)とさえ語るのである。

第一部の終結として、「私たちの内面の最も深いところから、『嗚呼、あなたが天を裂き降り給え!』(ach, daß du den Himmel zerrissest und führtest herab!) という、最も深い憧れが生まれてきます。これは自分と他人の不義に脅かされ抑圧され、義に向かつて、神の義に向かつて叫びを挙げる際、これは人間各自にあって、人間における最も強烈なものです(das ist das Gewalteste im Menschen, in jedem Menschen.)。ここで、神を理解する者は、神の全てを理解します(Wer ihn hier versteht, der versteht ihn ganz.)。ここで、神に手が届いた者は神に役立つことができます(Wer ihm hier die Hand reichen kann, der kann ihm helfen.)」と、バルトが「良心の叫び」として述べてきた意図がはっきりする。

II

バルトにとっては、次に取り上げる第二部の主張こそ、最も強く訴えたい部分であつたと思えてならない。そのテーマは「転換」Wendungである。「しかしここで、神の義に対する私たちの経験における顕著な転換(eine merkwürdige Wendung)が起きます」。「良心のラッパが鳴り響き、私たちは身をすくめ聖なるものに会つたと感じます(wir fühlen uns heilig betroffen.)。しかし私たちの困窮と不安から本当に私たちを救いださせようとは直ぐには思いつきません(aber zunächst denken wir gar nicht daran, uns aus unserer Not und Angst wirklich helfen zu lassen.)」と、バルトは述べる。

そこで起こるのは、バベルの塔である。『煉瓦を作り、それをよく焼こう』と話し合つた。石の代わりに煉瓦を、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言つた(創世記11章3節4節)。「このように私たちは自分の力で自分を助け、バベルの塔を建てます」とバルトは聖書を引用して語る。それを解説してバルトは「神の義への、私たちの内にある嵐のような神の義への願望を満たすことに、嗚呼、私たちは取り組みます(O wir haben es sehr eilig, das stürmische Verlangen nach der Gerechtigkeit Gottes, das in uns ist, zu befriedigen.)」と述べ、「そしてこの願望を満たすことは、こっそりと神の義を沈黙させること(zum Schweigen bringen)を意味します」と結ぶのであるが、ここに引用した数行の思いこそバルトが開戦以来悩んできた末、気付いた所である。

この発想を何度もバルトは繰り返す。『『何かが起こらなければならない!』(es muß etwas gehen!)と良心が語り、私たちが聴いています。しかし私たちは良心を最後まで語らせようとはしません。私たちは目を覚まさせられました。しかし何が問題であって、何を起こさなければならないのかに気付く前に、現実に起こったことよりも、私たちは寝呆けたまま突撃しています」。この文章はバルトが開戦直後に、説教で語ったことや、マルティン・ラーデ宛に抗議文を送った時期を、思い描くかのような内容である。バルトは「ここで最も深い人類の錯覚に、本来的に悲劇的な錯覚に、私たちは直面します」と、具体的に述べる。

- ① 「私たちは神の義を必要としていますが、私たちの人生、私たちの世界に神の義を入りこませることをしないし、ずっと入り口を塞いでいるために、この領域に入りこませることはありません。」
- ② 「本来的に私たちに必要であるものを、永いこと片隅に押しやり、このような状況の中で代用の薬で病み、さらに病気が進むようになるまで、ずっとあとの『よりよい時』まで延期してしまっているので、その必要であるものが私たちを助けられないのを、私たちは知っています。」
- ③ 「私たちは出掛けて行き、私たちの人間の義、人間の重要さ、人間の生真面目さの情けないバベルの塔を建てます。」
- ④ 「良心の呼び声への私たちの応答は、全生活に拡大した特有の代用品 (Surrogat)、特有な巨大な『かのように!』(“Als ob”) なのです。」

このようにして、「私たちが飢え渴いて望んでいる義の真実味は、私たちから外れて行きます」と、バルトは「神の義」が「人間の義」にすり替えられてゆくことを、経験に基付いて語るのである。

III

「神の場所には、私たちの思想による問題の多い作りものが立っていたのでした。神の義との関係を築くための、根本的に別の道 (einen grundsätzlich andern Weg) があります」とバルトは、「生ける神」を前提にして語り始める。「神が義であって、私たちが義なのではありません!」。「この神の義に向かうのには、謙遜が第一でなければなりません」「第二は、私たちが自分たちで考えている以上に、神はずっと大きいということをの喜びです」とバルトは述べ、「一つの新しい世界は、新しい(神の)霊から成長するのです。私たちが今いる困窮と不安の世界は、この新しい始まりがある所では、破壊されてしまいます」と言うバルトは、「別な世界」の力を人間とは異質な所に見ていたと言うことが出来るのである。

Über ≪Karl Barth: “Die Gerechtigkeit Gottes” in “Neue Wege” April 1916 S.143-154≫

Tatsuo Hamabe

Darstellung

Der erste Weltkrieg brach im August 1914 aus. Damals, am 31. August 1914, schrieb Karl Barth einen Brief an Professor Martin Rade über seinen Friedenswillen. (“Ein Briefwechsel” S.95) Am 25. Oktober 1914 predigte Barth von “Deine Gerechtigkeit ist eine ewige Gerechtigkeit” (Psalm 119,142). Darin zog Barth das Sprichwort im Deutschland “Not kennt kein Gebot!” aus. Da tadelte Barth kritisch die deutsche Tätigkeit in Belgien. ≪“Not kennt kein Gebot!”, sagte der deutsche Reichskanzler, als er darauf zu sprechen kam. Wir verletzen jetzt das Völkerrecht, Belgien hat recht, wenn es gegen diese Tat protestiert, aber wir können nicht anders. Wir werden uns bemühen, unser Unrecht gutzuachten, sobald der Zweck, den wir damit im Sinn haben, erreicht ist.”≫ (“Predigten 1915” S.533)

Den Vortrag “Die Gerechtigkeit Gottes” hat Barth am 16. Januar 1916 in der Stadtkirche in Aarau gehalten. Der Vortrag war außer den Predigten in Safenwil eine erste Gelegenheit, öffentlich zu sprechen. Aarau ist die Hauptstadt des Kantons Aargau, dem Safenwil gehört. Als Barth die erste Vortragssammlung “Das Wort Gottes und die Theologie” herausgegeben hat, stand der Vortrag “Die Gerechtigkeit Gottes” am Anfang dieses Buches.

Es existiert ein übersetztes Buch Karl Barths aus dem Deutschen ins Japanische. Das Buch heißt auf japanisch “Kamino kotoba to Shingaku”, eine Übersetzung der ersten Vortragssammlung “Das Wort Gottes und die Theologie” von 1924. Dort steht “Die Gerechtigkeit Gottes” am Anfang der Sammlung. Das ins japanische übersetzte Buch ist mit dem Datum 30. Juni 1941 versehen. Im Dezember gleichen Jahres trat Japan in den zweiten Weltkrieg ein.

Damals war die japanische Regierung sehr stark von einer Bereitschaft zum Krieg erfüllt. Deshalb ist diese Übersetzung in wichtigen Passagen unvollständig, besonders in diesem Artikel. 19 Zeilen auf der Seite 149 wurden gänzlich nicht auf japanisch abgedruckt und auch keine Anmerkungen dazu gemacht. Ich vermute, dass die folgenden ausgelassenen Sätze gefährlich waren: “Der Krieg ist wieder das schlagende Beispiel dafür: Weit entfernt, dass der Staat es auch nur versuchte, aus dem wilden Tier einen Menschen zu machen,

muss er umgekehrt den Menschen mit tausend Künsten zwingen, zum wilden Tier zu werden". Zwei Professoren der Universität Doshisha in Kyoto konnten diese Sätze nicht ins Japanische übersetzen. Wenn sie das gemacht hätten, dann wiche der Druck dieses Buches sofort. Es gibt einen großen geographischen Abstand zwischen Europa und Japan. Noch dazu einen Zeitabstand!

Was Karl Barth im Jahr 1916 während des ersten Krieges gesagt hat, wurde vor dem Eintritt Japans in den zweiten Weltkrieg 1941 ins Japanische übersetzt. Zwischen Europa und Japan stehen große Klüfte. Wer konnte die echte Meinung Barths in der damaligen Situation Japans richtig verstehen? Bis heute will niemand diesen Vortrag ins Japanische übersetzen. Also müssen wir mutig sein, diese großen Abstände zu überwinden, da man jetzt die zahlreichen Materialien von Karl Barth verwenden kann, wenn man möchte.

Die Gesammelten Vorträge "Das Wort Gottes und die Theologie" wurden 1924 gedruckt. Den zweiten Vortrag "Die neue Welt in der Bibel" hat die Kirche Leutwil, deren Pfarrer Eduard Thurneysen war, Februar 1917 erhalten. Der dritte Vortrag nach dem ersten Weltkrieg wurde September 1919 in Tambach in Deutschland, vor deutschen Theologen und Pfarrern gehalten.

Diese drei Vorträge zeigen uns eine der Quellen im großen theologischen Strom Barths. Bei dieser Quelle bestand eine bestimmte Voraussetzung: Es kam der erste Weltkrieg. Der erste Vortrag 1916 und der zweite 1917 fanden während des ersten Weltkrieges statt. Aber der dritte Vortrag 1919 hat sich nach der Katastrophe in Deutschland erhalten.

Karl Barth schrieb auf der autobiographischen Skizze folgendes: "Eine Wendung brachte erst der Ausbruch des Weltkrieges. Er bedeutete für mich konkret ein doppeltes Irrewerden: einmal an der Lehre meiner sämtlichen theologischen Meister in Deutschland,... - sodann am Sozialismus.." (aus den Fakultätsalben der Ev.-Theol. Fakultät in Münster 1927).

Übersetzung ins Japanische

Analyse